

洗練された
大人のおとぎ話 5

ピンクの豹という名の快樂

エッセイスト 岩田 裕子

泥棒は悪いものだけど、花泥棒と宝石泥棒に関しては、特別扱いされがちである。

花泥棒はともかく、古来、王族の持ち物である名宝も、インドの寺院から、盗まれたものもあるくらい、宝石と泥棒はきっても切れない間柄なのだ。博物館や宝石店には申し訳ないが、宝石は、夢の一部でもあるのだから、お話のなかで愉しむくらいは、ゆるしていただきたいのである。

アガサ・クリスティ、ホームズもの、ルパンシリーズなど、ミステリーに、欠かせないのはもちろん、宝石泥棒のテーマは、映画にも多く登場している。今回ご紹介するのは、なかでも極め付けに愉快的な1960年代映画、『ピンクパンサー』である。何の風刺も、隠されたメッセージもなく、お馬鹿なくらい、ただただ楽しい映画。いってみれば、センスだけでできている。ヘンリー・マンシー二作曲の、ユーモラスで印象的なテーマ音楽、可愛くて、



少しどじなアニメのピンクの豹。ご存知の方も多いうえ、改めて、見てみると、その道具だてのゴージャスで、お

しゃれなこと。宝石のきらきらをただただぼろりと眺めるのと同じように、何も考えず、気楽に楽しむのが、この映画の正しい鑑賞法だろう。宝石という記号が、贅沢や快樂の同義語である事を見ごとに感じさせてくれる映画である。

舞台は中東を思わせるある国の王宮。国王に恭しく差し出された、一粒のダイヤモンドがあった。その大粒のペアシェイプのなかには、小さなキズ（英語でちゃんとフローとっている）があった。動物の形のようにございます、と家来がいう。王がルーペでのぞくと、それは、豹に似ていた。しかもダイヤのそのあたり、ピンク色をしているのだ。ルーペでも内包しているのだろうか。

王が叫んだ。「ピンクパンサーだ」と。何年かがたち、名宝『ピンクパンサー』は、美しい王女（クラウド・カルディナーレ）のものとなった。

場所は変わって、ローマ。コロッセオの近く

の邸宅に泥棒が入った。金庫をこじ開けて、成功。宝石がとりだされる。その後には、白い手袋が置かれた。世界的に有名な宝石泥棒、快盗ファントム（デビッド・ニーブン）の犯行のあかしとして。

またまた場所がかわって、ハリウッド。一

高級スキーリゾートに、一同が会うことになる。革命軍から逃れてきた王女、王女のダイヤモンドをねらう怪盗、その怪盗を捕まえようとするクルーザーと、なぞめいたその妻、そして、青年。王女のパーティーの夜、スリリングであてやかなドタバタ劇が始まる。フ

アントムは実は、英国紳士リットン卿で、ダンディな魅力で王女に近づこうとする。クルーザーの美しい妻は実は、リットン卿の愛人で、夫の手から、彼を逃がし、宝石を奪う手助けもする。そこにやってきた青年ジョージはリットン卿の甥で、まじめに大学を出たと思わせているが、本当はずっと昔に退学し、借金をしてまで遊んでいる、さすが怪盗の血をひいたお洒落な悪である。偽の卒業写真は、スポンサーのおじにみせるためだったのだ。

すれ違いに嘘に誘惑、そして危険なロマンス、宝石への渴望。小道具はシャンパンに、優美なドレス、敷物の虎の毛皮に、花や可愛いペット、そしてドロップ型の真珠のイヤリングなど、きらびやかな宝

著作権の都合により写真は非掲載

「ピンクの豹」(米)1965年
監督・脚本: ブレーク・エドワーズ 脚本: モーリス・リスティン 出演: デビッド・ニーブン/
クラウド・カルディナーレ・ピーター・セラース/キャプシーヌ

写真協力「財団法人 川喜多記念映画文化財団」

人の青年（ロバート・ウグナー）が、仲間と卒業の記念撮影をしていた。大学の構内？いえ、それは、映画の撮影所だった。仲間達は、アルバイト、角帽とマントは映画の小道具。なぜ？

そしてまた場所が変わって、パリ。セーヌ川のほとりで、黒いサングラスの女（キャプシーヌ）が、男と取引していた。何かを手渡したとたん、警官が、逃げるおんな。近くの建物に逃げ込む。エレベーターの中で着替え、毛皮のコートを着た優雅な奥様風に。女は夫のオフィスをたずねる。夫はクルーザー警部（ピーター・セラース）だった！建物はパリ警視庁だったのだ。クルーザーは快盗ファントムを捕まえる作戦をたてているところだった。

コルチナ・ダンベツォ このイタリアの

石の数々。ついでに言えば、王女のペットの犬はアンパー（琥珀）という。快樂でいっぱい、この世の極楽のような、リゾートの夜。

ホテルのバーでは、歌手がこんな歌をうたっている。「今夜でなくてはだめ。明日のことなどわからない」この刹那主義こそ、この映画を魅力的にしているテーマだろう。日々の暮らしを計画的に送ろうとする普通の人々とは、対極にある。快樂原則。堅実な人生は時として、虚しい。快樂に貫かれた人生はなかなか送れるものではないが、だからこそ夢なのである。

そうおもってみれば、この映画のエンディングで、一番、ひどい目にあうのは、登場人物の中で、唯一まじめに仕事をまっとうしているクルーザー警部なのだ。遊び好きの悪

著作権の都合により写真は非掲載

の罪に陥れられたクルーゾーは、なんと国民の英雄になってしまうのだ。パトカーで連行されるとき、彼を捕縛する警官から花束を捧げられたクルーゾーの、なんと複雑な表情が、忘れられない。

クールビューティ、キャプシーヌのコメディエンヌぶりも、一見の価値がある。

たちは、無事に難局を切り抜けている。(ねたばれのように申し訳ないが)

クルーゾーは実に職務に忠実だ。妻とリラックスしようという真夜中。ファントムが現れたという偽情報を信じて(それは、彼の妻に言い寄ろうとしたジョージの電話だった)文句もいわずに、現地へ向かう。その仕事への姿勢には、素直に頭が下がってしまう。あれほど生真面目で、ついにはファントムの正体を突き止める優秀な警察官だ。そして、妻を心から愛し、彼女が、豪華な毛皮を着ていても、やりくり上手だと感心するだけだ。この映画では、まっとうすぎる彼こそが変人で、その行動の一つ一つがおかしくみえる。ピーター・セラーズの演技力があればこそ、こんなにまじめで、しかも面白い人物を表現できたのだろう。

ここまで、書いてきて、ふと思った。この映画は本当に、ただ贅沢なドタバタを愉しむだけの、お気楽エンターテインメントだろうか。そうであれば、これほど何度も見かせないはずだ。クルーゾーからみれば、地道に職務を全うしたのに、最悪のひどい目にあうという結末。しかも10年も愛続けた妻は、彼を置いて、彼が追い続けた怪盗やその甥と逃げてしまった。無邪気なだけと思われた若い王女は、ダイヤモンドを革命軍に取られないため、策略をはりめぐらす。この世の不条理 だろうか。しかし、曲者監督ブレイク・エドワーズはそれでは終わらない(彼は『アイファニーで朝食を』の監督でもある)。無実



岩田 裕子(いわた ひろこ)

東京都新宿区生まれ。慶應義塾大学文学部卒業(西洋史専攻)編集者を経て、少女雑誌、ファッション誌などに記事を執筆。現在は、宝石・妖精のエッセイストとして活躍。

岩田 裕子 作

妖精のように生きてみたい



河出書房新社 (価格 1,300円税別)

ホリー・ゴライトリーのように自由で気まま、恋するのが仕事、なのが妖精たち。彼らの生き方を参考に、いさぎよく、ドラマティックな人生をおくってみませんか。12か月の妖精たちも登場するので、あなたの生まれ月の守護妖精は何かがわかる。宝石にまつわる妖精もいるのよ。どんな妖精かは、読んでのお楽しみ。(作者より)

読んでみたい方は

河出書房新社 (03)3404-1201にお問い合わせ下さい。